書　評

加倉井周一 編
リハビリテーション機器
適応と選択

（AB判　284頁　5,768円（税込み）　1989年　医学書院 刊）

福井　圀彦

（鹿教湯総合リハビリテーション研究所）

平成元年11月末，神戸で開かれた第6回ISPOから帰ってきて間もなく，加倉井周一先生の執筆ならびに編集された“リハビリテーション機器：適応と選択”なる書物が上梓の運びとなった．

加倉井氏は多くの方がご承知のように，東京都補装具研究所の所長を長く勤められたこの方面の第一人者であり，私が常に敬愛している一人であるが，今回このような立派な，便利で，しかも広範囲にわたる書物を刊行されたことに対して賛辞を惜しまないものである．また，分担執筆しておられる諸先生方も私が昔から懇意にし，またいろいろとご教示いただいた方々がほとんどであり，大変懐かしく思いながら読ませていただいた．

従来も補装具や自助具に関する書物はかなり出てはいるが，しかし，もう少し広い領域のリハビリテーション機器となると，まとまったものは少なかったといえよう．今回出版になった“リハビリテーション機器：適応と選択”ではPT, OT, 看護婦，介護者にとって日常不可欠な機器に加えて，やや領域の異なる広範囲の介護機器や自助具がまとめられていることが特徴で，例えば家庭管理のための機器（育児用など），脊損患者・老人に必須な排尿，排便に関しての機器・器具などやコミュニケーション機器，スポーツ・レクリエーション機器などを挙げることができる．また，環境制御の具体的な方法や器具，さらは障害者用自動車についての記載も有難い．特に写真や図表が多いことは理解を助けるだけでなく，読者を飽きさせない．

さらにこの本の特徴は，そのサイズであろう（AB判：天地257 mm×左右210 mm）．A4版の縦を4 cmほど短くしたもので，当然のことながら通常のB5版よりスペースが広くとれ，しかも“ゆとりの空間”をたっぷりとったことである．最近は，住宅にしても街にしても，その設計にゆとりの空間を取り入れることが注目されているが，心理学的にもうなずけるところで，著者や出版社がこれだけ読みやすさに配慮していることを，読者は感謝すべきであろう（戦後間もなく使った，ザラガミに印刷された医学教科書を思い出して，今昔の感一入である）．

このスペースを利用して随所に“Q & A”を入れてあるのも大変便利である．平生気がつかないようなことで，いざとなるとその適応や選択に困ることは多いものであるから，これは大変参考になるものと思われる．

最後に参考資料としてリハビリテーション機器の公的給付に関して東京都の日常生活用具給付制度が掲げられており，基準額が付記されている．これは，障害者の退院に際してアドバイスを与えるときに大変参考になる．したがって，この書物はリハビリテーションに関係する医療従事者はもちろん，一般医療関係者，福祉医療・行政関係者，障害者家族など広い範囲の読者にとって必読の書ということができよう．

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/09/11 07:18:17